海の事件簿

⑥ 岩並秀一

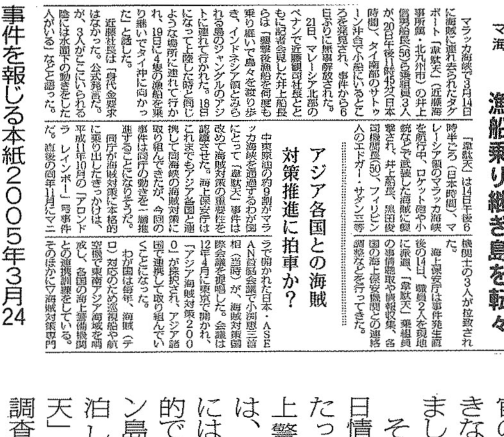
大切な海上法執行機関の国際連携

マラッカ海峡海上武装強盗事件

本庁警備課で不審船対策を担当していた平成17（2005）年3月14日、マラッカ海峡を航行中の日本船籍タグボート「韋駄天」が武装集団に銃撃され、日本人の船長、機関長とフィリピン人船員の3人が誘拐される事件が発生しました。

いわゆる海賊事件ですが、公海上ではなくマレーシア領海内で発生した事件なので、国際法上は「海上武装強盗」に区分されます。海賊対策を担当する国際刑事課は大変だなと思いつつ自宅に引き揚げたのですが、深夜にかかってきた電話は現場への派遣命令でした。当時、国際会議出席のため公用旅券を保有していたためのご指名です。慌ただしく手配した航空機を乗り継いで翌15日の夕刻には、同僚2人とともに「韋駄天」が錨泊していたマレーシア・ペナン島に入りました。

現地では、在ペナン日本国総領事館や、現地に駆け付けた「韋駄天」の船主と連携しつつ誘拐された乗組員の解放を最優先に対応に当たりました。一方、日本船舶の日本人船員等が拉致されたとはいえ、マレーシアが主権を有する同国領海内で発生した事件ですので、現地における我々海上保安官の活動には大きな制約がありました。



マラッカの海賊事件

船長ら3人無事解放

漁船乗り継ぎ島を転々

マラッカ海峡で3月14日に海賊に連れ去られたタグボート「韋駄天」（近藤海事所属・北九州市）の井上信男船長(56)ら乗組員3人が、20日午後11時45分（日本時間）、タイ南部のサトゥーン沖合で小船にいるところを発見され、事件から6日ぶりに無事解放された。

21日、マレーシア北部のペナンで近藤鋼材社長とともに記者会見した井上船長らは「襲撃後漁船を何度も乗り継いで島々を渡り歩き、インドネシア領とみられる島のジャングルのアジトに連れて行かれた。18日になって上陸した時と同じような場所に連れて行かれ、19日に4隻の漁船を乗り継いでタイ沖に向かった」と話した。

近藤社長は「身代金要求はなかった。公式発言だが、3人がここにいられる陰には水面下の動きをした人がいる」などと語った。

「韋駄天」は14日午後6時半ごろ（日本時間）、マレーシア領のマラッカ海峡を航行中、ロケット砲や小銃などで武装した海賊に襲撃され、井上船長、黒田俊司機関長(50)、フィリピン人のエドガー・サダン三等機関士の3人が拉致された。

海上保安庁は事件発生直後の14日、職員2人を現地に派遣、「韋駄天」乗組員の事情聴取や情報収集、各国の海上保安機関との連絡調整などを行ってきた。

アジア各国との海賊対策推進に拍車か？

中東原油の約9割がマラッカ海峡を通過するわが国にとって「韋駄天」事件は改めて海賊対策の重要性を認識させた。海上保安庁はこれまでもアジア各国と連携して同海峡の海賊対策に取り組んできたが、今回の事件は同庁の動きを一層推進することになりそうだ。

同庁が海賊対策に本格的に乗り出したきっかけは、平成11年10月の「アロンドラ レインボー」号事件だ。直後の同年11月にマニラで開かれた日本・ASEAN首脳会議で小渕恵三首相（当時）が、海賊対策国際会議を提唱した。会議は12年4月に東京で開かれ、「アジア海賊対策2000」が採択され、アジア諸国で連携して取り組んでいくことになった。

わが国は毎年、海賊（テロ）対応のため巡視船や航空機で東南アジア海域を哨戒し、各国の海上警備機関との連携訓練をしている。そのほかに▽海賊対策専門

事件を報じる本紙2005年3月24日号

それでも、連日情報交換に当たった現地の海上警察の職員は、我々の活動には極めて好意的でした。ペナン島の港内に錨泊した「韋駄天」の被害状況調査、乗組員からの事情聴取などに便宜を図ってもらったほか、ペナン島からマラッカ海峡内の「韋駄天」の基地への回航に際しても、再び海賊に襲われることのないよう海上警察の船艇で警戒するなどの配慮をしてくれたのです。

そして、事件発生から約1週間後の3月20日、誘拐された「韋駄天」乗組員3人は幸いタイの沖合いで解放され、地元漁船に無事救助されたのでした。

マレーシアにおいては、アジア海上保安機関長官級会合の前身となる第1回目の海賊対策専門家会合が平成12（2000）年に開催され、平成15（2003）年7月にはペナン島に海賊対策の一環として巡視船「やしま」が寄港し、「海上保安セミナー」等も開催されていました。現地海上警察の我々に対する好意的な対応には、このような活動が影響していたと思います。事件の翌年、同国は「マレーシア海上法令執行庁」を発足させました。

「韋駄天事件」のような事案の再発を防止し、万一の事案に適切に対応するためには、海上法執行機関の連携が引き続き不可欠です。

（第45代海上保安庁長官）

＝つづく